



Suita Digital Citizenship

吹田市 デジタル・シティズンシップ教育通信 第2号
令和5年(2023年)3月20日 吹田市立教育センター発行



吹田市におけるデジタル・シティズンシップ教育

吹田市では、GIGAスクール構想に伴う一人1台端末の導入に合わせてデジタル・シティズンシップ教育を「吹田市ICT教育グランドデザイン」の土台となる教育に位置付けました。

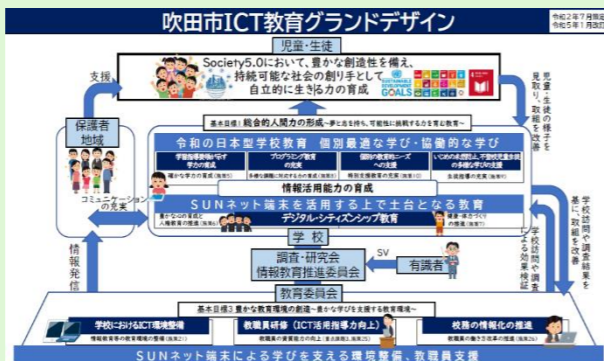
今回は、吹田市におけるデジタル・シティズンシップ教育について紹介するとともに、吹田市で実施しているいじめ予防の取組とデジタル・シティズンシップ教育との親和性についてお伝えします。

①デジタル・シティズンシップ教育の導入

吹田市では、「ともに学び、ともに育つ」という教育理念の下、多様な価値観と人権の尊重を基礎に置いた教育を実践してきました。デジタル・シティズンシップ教育においては、インターネットの世界を公共の場と捉え、相手の立場に立つこと(共感力)やウェルビーイングの視点で立ち止まって、どう行動するのかを考えることが大切であるとされています。吹田市がこれまで実践してきた教育とデジタル・シティズンシップ教育は大変親和性が高いものであったため、広めていく大きなきっかけとなりました。

②吹田市 ICT 教育グランドデザインの土台となる教育へ

GIGA元年である令和3年度を見据えて、令和2年7月に「吹田市ICT教育グランドデザイン」を策定しました。GIGA スクール構想によって、多様な全ての子供が端末を学習用道具として使用でき、誰一人取り残すことのない教育環境が整いました。そこで、デジタル社会を生きる善きデジタル市民となるための基盤となる教育として、DC教育が必要であると判断し、グランドデザインにも土台となる教育として位置付けました。



DC教育をスタートさせる上で大切にしたい考え方は以下の3点です。

- 【共通の軸足】を明確にすること
- 授業の中で【対話】を大事にすること
- シティズンシップ教育という観点から、子供の周りにいる大人を巻き込むこと

【共通の軸足】とは、デジタル・シティズンシップ教育における3本の柱と「SUN ネット端末は学習用」であることを加えた、合計4本の柱のことで、

- (1) インターネットの世界は公共の場(仮想空間も現実世界も同じ)
- (2) ICTを責任を持って積極的に使う
- (3) 立ち止まって考える(相手の立場に立って ウェルビーイングの視点で)
- +
- (4) SUN ネット端末は学習用

端末に関しての生徒指導事案や課題が生じたときは、この4本柱を共通の軸足として、子供たちと「対話」しながら解決へと導くことを大切にします。

DC教育と吹田の教育との親和性って?~いじめ予防の取組から~

吹田市では、令和元年6月に「いじめに係る重大事態調査委員会」がまとめた調査報告書を踏まえ、いじめ防止に係る様々な取組を「すいたGRE・ENスクールプロジェクト」として進めてきました。(取組の全体像は、右のQRコードもしくはこちらの[リンク](#)から)



今回は、「すいたGRE・ENスクールプロジェクト」の中から、DC教育との関連の深い『いじめ予防授業 TRIPLE-CHANGE』について、その関係性も含めて紹介します。

『いじめ予防授業 TRIPLE-CHANGE』って?



『いじめ予防授業 TRIPLE-CHANGE』は、いじめの未然防止を目的として、令和2年度から市内の全公立小・中学校で実施している年間3時間の授業です。科学的知見に基づいて作成されたワークブックを使用し、吹田市に住むすべての子供が「アンバランスパワー」や「シンキングエラー」、「やはた行動」「HERO 行動」等の共通言語をもとに、子供たちが自分たちの日々の行動について考えることができる視点を身に付けることができる教育になっています。

DC教育との関連って?

『いじめ予防授業 TRIPLE-CHANGE』には、次の4つの「教育」が含まれています。

①法教育

法の背景にある価値、法やルールの役割・意義を考えそれに基づいて思考する教育。

②SOSの出し方に関する教育

誰にどうやって助けを求めればよいかや、助けを求めてもよいということを学ぶ教育。

③アッパスター教育

傍観者ではなく、事態を改善するために行動を起こすことを選択できる人を育てる教育。

④シティズンシップ教育

他者を尊重し、社会の一員として自立し、社会に積極的に関わろうとするための態度を身に付ける教育。

一方、DC教育については、左の記事にあるように、3本柱の中で「公共の場において、相手の立場に立って、ウェルビーイングの視点で立ち止まって考えること」を掲げており、デジタル空間だけでなく、現実世界におけるシティズンシップ教育についても取り扱っています。

さらに、授業の最後には、今後どのような行動を起こしていくのかについて考える機会を設けており、様々な場面において自ら積極的に行動するアッパスター(事態を改善するために行動を起こすことを選択できる人)を育成することにつながっています。

実際の、DC教育の授業実践の中でも「これ『やはた行動』に似てる!」等といじめ予防授業で学んだ言葉を使って自分の考えを伝える子供もいました。

このように、吹田市が令和2年度から取り組んできた『いじめ予防授業』とDC教育は親和性が高いものとなっています。

【編集後記】

いじめ予防授業を担当しているのですが、今回の記事を作成する中でデジタル・シティズンシップ教育は様々な教育活動の土台となる重要なものであると改めて感じる事ができました。今後も教育センターとして、この考え方を学校現場の先生方に周知するとともに、吹田市の子供が一人の市民として行動できるよう取組を進めていきたいと思っております。
(文責:加藤 中野)

吹田市の挑戦

デジタル・シティズンシップ教育



HP
(ホームページ)